

それと、広島は全然違うわけです。近代が直面した大量死ということを経て、生まれてきたような都市なのかもしれない。天皇の住まいの場所も祈るところです。大都市のなかにあれだけ広大な場所がある。同じとはいえないけど、広島もそういう場を抱えている。都市には抽象的なところがあるんじゃないかな。うまくいえないけど、いわゆる無意識みたいなものが都市には働いているように思いますね。村や集落には、われわれの生活の営みから生じる理解がある。でも、都市には、そういう理解とは違う磁場によってできあがっているような感じがします。イタロ・カルヴィーノ(注2)の小説のように、水上都市とか、都市にはそういう命名の仕方ができる。確かに広島だったら公園都市だし。でも、村や集落にそういう命名はできない。

都市を証言する者

松田 それから「都市を証言することについて、特に前々作の『クリプトグラフ』(注3)という作品以降、考えていますが、都市を人格化する住人がいる感じがします。その都市のことを語る人。それが演劇になればと思うんです。それは農村とか漁村といった集落とは違うような「広告」になるような気がするんです。うちの村は米がたくさんとれるとか、魚がたくさんとれるとか、死んだらあそこに神の山があって死者はあそこにいくんだ、という言い方だと、観ている人とコンセンサスがかかる。でも、「僕が住んでいる都市は公園都市で…」などと、観ている人たちは、ただちに納得できない。笹岡さんがいうように、住人として住んでいたら、いつのまにか納得させられているんだけど、考えてみたら自分の街は妙だったことがある。とすれば、そのことについて何かを語る人がいてもいいのかなと思って。都市の証言ってそういうところがあるのかなって思って。それはそもそも都市の成り立ちが奇妙だということでしょうね。

笹岡 広島の被爆証言者から、学校で直接体験を聞くことがあります。他にも資料館のなかで流れているビデオで証言を聞くこともあります。そこで語りは、たいていが普通の広島弁よりも標準語寄りだし、抑揚のつけ方とかとも上手で相手を引き込んでいく。恐れずに言えば、すごく演劇的でどこか空々しいんですね。同じように県外の人たちも一般的には被爆の話を過剰なほど慎重に扱うとするんだけど、地元のおっちゃんたちは「爆弾が落ちたんじゃけえの」って全然慎重じゃない話し方をする(笑)。地元の飲み屋なんかで普通に耳にします。それは本当に都市の声ですね。そんなふうにここまでいってもギャップがある。一方で、この前フローワースティバルっていうイベントがあったんですが、8月6日の慰靈式が静儀式だとしたら、こっちは動の儀式ですね。お祭りとして平和をアピールする。それはすごい人出で大盛り上がりです。こうしたアピールのなかで広島出身や在住の若い人たちが、広島に生まれたから平和を訴えたい、みたいな素直さというか単純さもどこか空々しい。

松田 「広島に生まれたからには、平和を語らなければならない」っていうのは、異常なことで。演劇の世界でも、広島に生まれたからには平和を訴える演劇をやる、原爆について語らねば、っていうのはある。証言者をはじめ声がパフォーマティブになるっていうのは面白い。

笹岡啓子(ささおか·けいこ)

1978年、広島県生。東京造形大学卒業。ギャラリーの運営、展覧会や写真講座の企画、機関誌や写真集の発行など「写真」というメディアを使って多岐にわたる活動を展開する写真家集団photographers' galleryの設立メンバー。機関誌「photographers' gallery press」2~7号編集責任。2008年、VOCA展奨励賞受賞。2001年、初の作品発表以来、意欲的に国内外で個展やグループ展を開催。広島に育ち、街を離れたことから、歴史的な街(広島)の内側と外側を見つめる。その経験が、多くの作品に影響を与えている。一方で力強さを、また一方ではクールさを感じさせるその視点が多くのファンを魅了。現在、数々の批評家、写真愛好家から期待される若い世代の写真家の一人。

松田正隆(まつた·まさたか)

1962年、長崎県生。90~97年まで劇団「時空劇場」代表。96年『海と日傘』で岸田國士賞、97年『月の岬』で読売演劇大賞作品賞、98年『夏の砂の上』で読売文学賞受賞、2000年には京都府文化奨励賞など、数々の賞を受賞。舞台戯曲の他、黒木と雄監督作品『美しい夏キリシマ』『紙屋悦子の青春』で、映画脚本・原作提供を行う。2003年より「マレビトの会」を結成。代表作に『島式振動器官』『クリプトグラフ』『声紋都市—父への手紙』など。

山口情報芸術センター滞在制作作品『PARK CITY』

【作・演出】松田正隆 【写真】笹岡啓子 【出演】牛尾千聖 F.ジャパン 桐澤千晶 ごまのはえ 島崇 武田暁 西山真来 精谷雄一郎 宮本統史 山口春美

日時：2009年 8月28日(金)19:00、8月29日(土)14:00／19:00、8月30日(日)14:00

会場：山口情報芸術センター[YCAM] スタジオA <http://www.ycam.jp/>

日時：2009年10月24日(土)14:00／18:30、10月25日(日)14:00／18:30

会場：滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール 大ホール 舞台上舞台 <http://www.biwako-hall.or.jp/>

「marebito 03」

〒606-8205 京都市左京区田中上柳町21、3号室 [2009.5より事務所移転しました] TEL&FAX 075-708-8025 MAIL info@marebito.org http://www.marebito.org/

発行：マレビトの会 発行日：2009年7月30日 表紙写真撮影：丸尾隆一(YCAM InterLab) デザイン：相模友士郎

笹岡 これまでそんなふうに思ったことはなかったんです。きっかけは、沖縄の写真家の比嘉豊光さんと一昨年関わったことです。彼自身は写真家ですが、「琉球弧を記録する会」として、島クツバで語られる戦争体験を映像で記録しているんです。たくさんの語りを集め、追加編集されながら、7、8時間ある映画として上映されています。字幕がないと語りの内容はほとんど聞き取れないんですが、それを見たとき、証言をしているオジ、オバアは、途中で話をやめちゃったり、感極まって泣いてしまったり、怒りだしちゃつたりと、広島の証言者たちは全然違うんです。もちろん、私が広島で見ている物が限定されているということもあるとは思いますが。

松田 語り部たちの独特のモードってのはあると思います。語りモードっていうのかな。前回『声紋都市—父への手紙』(注4)は、長崎の取材からはじめたんだけど、マイクを向けたら、ぱっと語り部が「被爆者」に変わるんです。空気感が変わるんです。決まりきった話し方ってものもあるよう思えた。たぶん、語り手もそうなんだけど、聞き手がそういうモードを要求している。だから、語り手がパフォーマティブになるということは、聞き手がそういうことを要求していることだと思う。意識化されているかはわからないけど。たぶん、ウチナーグウチの語り部たちっていのは、まず「何で語らなにやあかんの?」って疑問があったんじゃないかな。誰に話すかが、そして話し相手が何を要求しているのかが見えない。広島の語り部たちは、自分たちはライセンスをもっているから、皆さんに聞いてもらうひとつの芸として語るんだろうね。語り手と聞き手の通路がぱっとできる。でも、沖縄の場合は、聞き手への疑念みたいなものがあるんじゃないかな?だって、誰に対して語るのかなっていうのがわからないから。演劇もそうです。観客の求めるものがわかっていないれば、それに応えればいいんだからある意味で何でもできる。でも、誰が観客なのか、対象がわからなかったら、そうはいかない。語り手と聞き手の間がスムーズになる場合と、聞き手が想定できないって場合の違いかもしれないですね。

(2009.5.10 山口情報芸術センターにて)

注1:ヴァルター・ベンヤミン[Walter Benjamin,1892~1940]

ドイツの思想家・評論家。ユダヤ神秘思想とマルクス主義を背景とする獨得の思想を展開し、神秘的洞察力に満ちた多くのエッセイを書いた。1933年ナチスに追われてフランスに亡命、さらに追われてビレーヌ山中で自殺。主な著書に『複製技術時代の芸術』『ドイツ悲劇の根源』『バサージュ論』など。

注2:イタロ・カルヴィーノ[Italo Calvino,1923~1985]

イタリアの作家・評論家。科学的知見に基づく作品から、イタリア全土から採集した民話をまとめた『イタリア民話集』の編纂など、幅広い手法で文学作品を残す。マルコ・ポーロを語り手に架空の都市を描いてゆく『見えない都市』では、空想的かつ実験的な手法を取り入れ、作品を発表。『見えない都市』は、松田正隆 作『クリプトグラフ』のモデルにもなっている。

注3:『クリプトグラフ』

エジプト・カイロのMIAMI THEATERにて初演(2007年9月)。以降、京都、北京、上海、ニューヨーク、ラクナウにて巡演。今年、東京のこまばアゴラ劇場と名古屋の七ツ寺共同スタジオでの再演を予定。作・演出：松田正隆。

注4:『声紋都市—父への手紙』

伊丹市のアイホール、東京芸術劇場小ホールにて上演(2009年3月)。作・演出：松田正隆。



NewsLetter

marebito

03

マレビトの会
| Marebito no Kai | theater company |

マレビトの会では、山口情報芸術センター[YCAM]滞在制作作品『PARK CITY』を、山口情報芸術センターにて8月28日から30日に、滋賀県のびわ湖ホールにて10月24日25日に上演いたします。本作では、東京・新宿のphotographers' galleryを拠点に活躍する若手写真家、笹岡啓子さんとの共同作業を通じて、作品づくりを行っていきます。

笹岡さんの写真集と同名タイトルの新作『PARK CITY』のテーマは、戦後、PARK(公園)を中心に復興した都市「広島」。マレビトの会ニュースレター『marebito vol.3』では、自身の故郷でもある広島の写真を撮り続けている笹岡さんと、劇作・演出家の松田正隆による対談を掲載いたします。

対談 笹岡啓子(写真家) × 松田正隆(劇作・演出家)

PARK CITY(公園都市)—モノの言語、ゼロの時間—

写真を撮る、裏切りの装置

松田 最近デジカメを買ったんですね。よく散歩にカメラを持ち歩くようになって。笹岡さんと一緒に作品を作ることになって、少しカメラと写真のことを考えようと思ったんです。そんなに詳しいわけじゃないんですけど、昔から写真は好きだったんです。写真って何だろうっていう思いが常にありました。

今回、写真をすると写真について考えながら演劇を作ろうとするならば、一度少し写真をやってみようかなと思ったんです。空いた時間に、暇にまかせて、街を歩いて写真を撮る。ちょっと自分が気になったら、何も考えずに撮ろうと思ったんです。それで、後で見返してみると、まず最初に思うのが、自分の肉眼でみたときと、つまり、こういうふうに撮れるんじゃないかという予測とだいぶ違いますね。それが不思議だな、と思いました。どうして違うように思えるのか、と。

笹岡さんは、つまらないかもしれないけど一応撮っておこうと思ったものが、面白かったりすることもありますか?自分の肉眼とか、主体とかを裏切る装置として、おそらくカメラってあるのかなっていうのがあります。現実を現実を切り取るといつても、切り取るのはカメラの方なわけですから。写真を撮るときに、あたかも撮る主体があるかのような言い方が

あるのだけど、なんかそれとも違う。撮られた写真の方から、はっとさせられる。そんな感じがしたんです。笹岡さんは、写真をどういうふうに撮ろうと思うんでしょう?たとえば、大きなモチーフが、今回の場合『PARK CITY』というのがあって、撮る動機みたいなものがあって、具体的には街へ行って撮るわけです。そういうときに、そのモチーフと合っているから「これいいな」って思って撮るのでしょうか?

笹岡 なぜそこか、なぜいまか、というのは自分では説明しにくいですね。いま松田さんが、気になるものを何も考えずに撮ったと言われましたが、私も同じです。気になるものを探っていく。頭ではなく身体が気になるものというか、身体が反応したらというか。とにかく撮っておいて、後で選びます。撮っているときは面白いと思っていたものがつまらなかったり、撮ったことも覚えていないようなものがおもしろかったり。『PARK CITY』は、特に広島という場所がモチーフというか前提としてあるんですけど、撮っているときは同じです。特に『PARK CITY』に関しては頭で考えて始めると撮れなくなるんですが、もう9年くらい撮っているので最近はどうしても考えてしまって、それを振り払うのにイライラしたりうんざりしながら撮っています。

松田 写真家の創作の部分って何なんですかね?創作部分っていうのは、インスピレーションってことなんでしょうけど、写真の場合は、それがそのままにはならないってわけですよね。もちろん変化していくことはあるだろうけど、大半の創作活動は、脈絡をつくて、創作動機と最終的な作品のイメージみたいなものが、だいたい合致したもので完成させていく。それに対して、一瞬にして、写真を撮る、カメラのシャッターを押すっていうときの、写真家の創作しているところ、クリエイティブな部分って何なのでしょうか?

笹岡 最終的にはプリントや展示という仕上げの部分で重要な創作がありますが、その前に、私の場合は、撮る量と、それだけ撮った中から選ぶこと、選びの部分でしょうか。選ぶためには量がなければいけない。量がある程度ないと方向性や身体性は出でこない。デジカメではなく、いまだにフィルムなので、馬鹿だなあと思いながら、お金を投げ捨てているかのような気持ちでかなりの量を撮ります(笑)。デジカメは撮ってすぐ見られるので……。

松田 デジカメは、違うなって思ったら消しちゃいますからね。

笹岡 その部分が、まだ自分の身体性には合わなかったりするのかもしれないです。撮った後のタイムラグ、撮ってから選ぶまでの時間差がないですからね。だからあえていうとしたら、私にとっての創作の部分というのは、いまのところ選びの作業なのかもしれないですね。



笹岡啓子「PARK CITY」より(2007年)

モノの言語——公園の言葉——

松田 創作というのは、現実を引用する、その切り取り方で判断をしているのだと思いますが、でも、ここに焦点が合っているっていっても、それ以外の部分がみえてくる。そっちの方が面白くなってくる。「こんなものが写っていたんだ」という部分ですね。人の表情を写しても、「こんな表情だったんだ」という不思議な感じになるときがある。たとえば、笹岡さんは『観光』というシリーズで写真を撮られていますが、観光地なんかにいくと絵葉書がある。京都にいったら絵葉書を買って、京都を納得するために、名づけるともいいのか、「京都ですよ」という典型的な風景を手に入れる。でも、観光っていいながら、あの写真をみても判断がつかない部分がどうもある。笹岡さんの写真をみていると、その部分に気づかされるんです。『PARK CITY』にしてもそうです。広島の表象をする場合にも、どうしても広島の原爆都市の部分を想起させるような、それをみて納得できる、名づけることができるような、脈絡ができるような、意味づけのためにある写真があります。けれど、笹岡さんの写真は、見えてくるまで時間がかかる、見えてきたって思っても、そのあと単純に納得いくようには写真ができる気がしない感じがします。そこが魅力だと思います。

笹岡 そう言っていただけるとなんだか嬉しいです。広島や長崎、原爆というものをテーマとした写真の先輩たちはすでにたくさんいます。だからというわけではありませんが、たとえば、平和を訴えるとか原爆という出来事を忘れないようにしましょう、という目的での制作は、私がすることではないと思っています。むしろ、これまで名づけられてきた広島が抱えている二重性みたいなことに興味があります。長崎がどうなのかということは、後で松田さんにお話を聞きたいんですけど。たぶん、そこに住んでいる人にはあまり自覚がないけれど、かと言つて外の人もなかなか気づくことができない。そこに住んでいて外に出ただからこそ感じることができる。言葉にするのもどかしい微妙な二重性なんですけど、すごく重要なことだと感じています。

松田 この前、広島を案内してもらったでしょう。慰霊碑の前のほこらみたいなところを覗きましたよね。あれは、追悼のためにある「わかる」風景です。そのほこらからの眺めの方へ、平和資料館や原爆ドームのうしろ、橋を渡つて、市民球場の方へと歩いていく。すると、かつて、原爆スラムがあったところに、広大な何もない空間、まさにPARKが広がる。とたんに、

さっきまでわかつていた、腑に落ちる場所から腑に落ちない場所へ移つてしまつ。『何でこんなに空間が空いているんだろう』って思ったときに、公園それ自体が持つてゐる言葉みたいなものが、浮かび上がつてくる気がしました。公園言語って言つていいのかはわからないけど。

さっきまでの記念のための、メモリアルのための言葉たちは、「わかる」んだけど、電車道を渡つた向こう側、公園、さらに向こう側には居住空間が広がつてゐる場所へ行くにしたがつて、言葉にならないような感じがある。行き場がないこの空間をどう理解していいのかわからないということ、それ自体が、笹岡さんの写真には写つてゐる気がしたんですね。そこはかつて原爆スラムだったところを再開発して、なおかつ残つてしまつたところです。その来歴みたいなものはわかる。わかるんだけど、それだけでは現在あそこに足を踏み入れたときの不安感、腑に落ちなさはわからない。「ばっかり」しているといつたらいいのかな。確かに、きれいで、風も吹いていて、気持ちよくて。でも、都市の真ん中にこんなところがあつていいのかなって感じるわけです。

ドイツ思想研究者で詩人の細見和之さんが、地震のときには地震の言語があるってことを書いている書物を読んだことがあるのですが、もっとも、こういった言語一般があるってことは、ヴァルター・ベンヤミン(注1)が言つてゐることらしくて。たとえば、私が「コップ」っていうことができる、そういう人間の言語とは異なる、事物なり出来事なり、たとえば地震がおこつたときの言語がある。つまり、人間は地震のときにつく出來事を言語化できない。もちろん、その雰囲気のことをいろいろといふことはできる。怖かったとか、それぞれに証言はできるけれども、実は違う言語として、襲い掛かってくる言葉がある。なかなかそれを人間の言語には翻訳し得ないんだけれども、それをなんとか分かるように翻訳したりするのが、詩だったり、美術だったりする。笹岡さんの写真に感じたのは、そういう翻訳家としてのものなのかもしれません。

原爆の言語を翻訳しているというよりも、あの公園の言語とでもいえるような言語を翻訳している。原爆後にできてしまつたばっかりと浮遊してゐる落ち着かない感じが、「PARK CITY」の言語ではないか、PARKの言葉ではないか。それがあの空間には実は満ち溢れている。それを翻訳するために笹岡さんの写真があるって具合に。勝手な解釈なんですが、そう思つたんですね。

カメラにおさまつたものをみたときに、腑には落ちないんだけれど、何か訴えかけてくるものがあるっていうことです。それをまた言葉にするのは、むずかしいですね。

笹岡 公園の言語……。私の写真が翻訳の役割をできていれば嬉しいですね。やはりあの場所は不思議な場所であるような気がしたんです。

「ゼロ」に戻る、戻される

松田 笹岡さんが公園に惹きつけられるっていうのは、どうしてでしょうか?

笹岡 あの公園は、自分にとっては当たり前としてきた場所なんだけど、外に出たときに全然当たり前の場所ではないようにみえた。そういうとつかり、きっかけの場所なんです。撮影のために毎日公園の周辺をぐるぐる周つているんですが、あそこは復興もして、発展もして、人もこれだけ生まれて、日常的にたくさん的人が歩いている場所であると同時に、メモリアルな場所として観光客も大量にきています。それこそ観光業自体が落ち込んでゐるのに、あの場所を訪れる観光客はすごく増えています。資料館にも嘘みたいに行列ができる。原爆以後に生まれてそこに生きている人たち、それ以前からそこに生きている人たち、観光として訪れる人たち。それぞれもつてゐるものになにかズレがあって、そのズレのためにまた「ゼロ」に戻つていく。どれだけ復興しても、どれだけ平和だとしても、いつでも、きっといつまでも、やはりそこに戻されてしまうという感覚があるんです。

松田 戻される?何が「ゼロ」に戻るんだろう?広島には、いろいろな人々がいる。たくさん観光客や、そこに住んでいる人たちがいる。新しく生まれた人や、戦前から生きている人、その中には被爆者もいる。さまざまな層がある。

笹岡 なんていえばいいんだろう……。時間の速度というのかな。発展していく現在とは別に、もうひとつの時間があるようを感じるんです。それはなかなか実感しにくいことかもしれないけれど、広島という場所に、ある種、自覚的に住んでゐる人は感じたことがあるかもしれません。時計の秒針と時針みたいに、現在は音をたてて主張しながら進んでいくんだけど、もうひとつの時間はまるで進んでいないようでいて、でもふと見ると針がわずかに動いています。そういう速度の違うふたつの時間軸がふとした拍子に重なつたりすると、とたんに「ゼロ」に戻されてしまうような。

松田 忘れさせてくれないってことかな?発展しないような仕組みになっている?

笹岡 そうですね。逆に忘れるなど声高に言えば言うほど歪んでいく。むしろ言わなくて忘れさせてくれない時間ががねにすでにあった。発展の仕方も奇妙な方向に進むわけです。それこそ、平和都市建設法、平和の象徴として復興しましょう、ということを住民たちの投票で決めたわけですし。

松田 引き戻す「ゼロ」の時間があるってことかな?

笹岡 まるで止まつたまま、もしかしたら進んでいたり遅つたりして、行つたり来たりしているような時間がどこかにつねにある。それが忘れてくれないとかそれを忘れてはいけないということとは違つて、ずっと「在る」ものといえばいいですかね。

松田 それは住人の心理とか、広島に来る人たちの心理とは別に、常に廃墟の「時間」が流れているということ?

笹岡 そうですね。廃墟の時間ともいえるもうひとつの時間があるんだと思うんです。

松田 笹岡さんが写真に撮るとき、撮りたいという意思があるかどうかは置いといて、そこに惹かれるというのは、そういう方向からの力があるということでしょうか?

笹岡 そうですね。引き寄せる力があるのかもしれないですね。

松田 それが「ゼロに戻される」という言い方になるのかな。この言葉には、はつとさせられたんです。

笹岡 そういう力に惹かれたというか、たまたま、あ、と気づいてしまつた。だからこそ私が撮らなければ、という使命感ではなくて、それはもう覺悟を決めるというかあきらめるというか(笑)。



撮影:丸尾隆一(YCAM InterLab)

広島と長崎

笹岡 長崎はそういうのがあるんでしょうか。私は長崎にも何度か行ったことがあるんですが、公園はあっても広島のようなスケールの公園ではないですね。

松田 長崎は、なにもかもが最小限って感じですね。とりあえず、メモリアルなものもあるんだけど、土地がないから隙間なく人々が建つていかざるを得なかつた。もちろん、メモリアルとして残していくかなきやならないから、すこーんと爆心地近くに土地は空いてます。その爆心地の空き具合が、広島とはえらく違いますね。長崎は、爆心地に生活がどんどん入り込んでいる。そういう感じはします。

笹岡 長崎がたどつてきた道が広島と近いとしたら、同じようなことが起こつているのかなと思うんですが、その後の作り方が違う気がします。もっとも、住んだことがないので、それこそ旅行者としての感想ですが。

松田 ここ何回か行つてゐる広島で感じた、記念の場所って言ひながら、言葉にできないような場所でもあるような不安感といったものは、長崎にはない感じがします。生活できない場所があるっていう感じが長崎にはないんです。あと、宗教の浦上という場所が大きいのかもしれません。受難として、被爆を宗教の脈絡に捉えることができたってことも大きいと思います。もちろん、そうではないという人もいますけど、被爆者の祈りというときの祈り方が、キリスト教の祈りとして回収できるということ。被爆をひとつ受難として捉えた信者がいるっていうこと。その宗教の力っていうのは、重要なことだと思います。でも、広島はそんなふうには宗教に回収できない場所です。

長崎とくらべることで納得してもしようがないのかもしれないけど、長崎の場合は中心を聞んでぐるっと回つてゐるんで、あんまり不安感がないんです。ずっと爆心地を日常のなかで見下ろすようにできあがつてゐるんですね。それさえも受け入れるというか。地形の影響ももちろんありますが、長崎の場合は人々が見守つてゐる感じがある。広島の四方へと突き抜ける感じとは違いますね。広島は見守つてゐる視点がわからない。

笹岡 広島はそいつの意味で住む空間ではないってことですかね。

松田 そうですね。ただ、公園の向こうに基町アパートがありますね。高層ビル群つていつたらしいのかな。あれも不思議な感じがしました。急に世界が変わって、なんか商店街も建物のなかにあるんですね。昔はにぎわつてゐたんですか?

笹岡 にぎわつてゐたと聞きますね。いまはすっかりシャッターが降りていて、病院、銭湯、商店、学校もあって、あそだけで生活できる空間になつたみたいです。



引用:広島平和記念会館総合計画／1950年
『丹下健三・藤森照信 著(2002年／新建築社)

都市であること

松田 笹岡さんは何故タイトルに「CITY」をつけたんですか?

笹岡 公園を撮つていて、タイトルをつけようとしたときに、自然に「PARK CITY」だなと。腑に落ちるというか素直に受け入れられたんです。漢字にしようとカタカナにしようとHIROSHIMAという発音を入れると、どうしても先入観をもつて写真を見てしまう。そうではなく、ある都市の写真なんだよ。1980年前後のアメリカ西部にあるリゾート開発地を撮影したルイス・ボルツの『Park City』という有名な写真集があって、その言葉も知つていました。特に意識したわけではないけれど、参照項のひとつとしてはあったと思います。

松田 広島が公園都市なんですか?それとは関係なく、公園というものが広島という都市なんですか?

笹岡 はじめからそう思つてたわけではないけど、広島が公園都市だし、公園のなかに都市があるとも言えますね。実際、かつてはひとつの町があつたわけですけど。広島っていう街の「気持ち悪さ」っていう意味で何かあると思ったんですね。公園を中心に成り立つていて、公園が中心に在るたたずまい。いまに至つても、たとえば旧市民球場の跡地問題では、大きな公園と公園の間にまだ公園作ろうという人もいる。当たり前だと思って育つたんですが、全然当たり前じゃなかつた(笑)。そういう在り方の街だなっていう、圧倒的にそうだという妙な確信があります。

松田 都市って何だろ。人や家が集まつてゐるところなのかな。なんで都市なのかなっていうのは、あらためて考えるとなかなか難しい。僕は田舎で育つて、物心ついたときに住んでいた長崎という街を声紋都市と名づけましたが、模様のように、地形にへばりつくように、段差のある斜面に生活がある。家が建つていて。それを原風景にみた後に、ものすごい田舎引つ越したんですよ。それで、今度は都会で生きていたいと思ったんだよね(笑)。そういうながら、結局京都に住んでゐるんだけど(笑)。でも、東京みたいな都市には惹かれますねえ。

それと、さつき、笹岡さんがいた「ゼロ」って言葉が引っかかるんだよね。なんか超高層ビルを建てれば建てるほど、「ゼロ」がみえるみたいに、背景がみえてくる。二重写しになつていて。そういう部分が都市に惹かれる部分かもしれないな。こんなに人がいていいのか?おかしいだうって。

それと、都市のなかでも、広島はまた違うのかもしれない。死者を追悼する仕組みのなかで街が作られていくという気持ち悪さ。普通の農村の集落だったら、死に場所があつて、慰霊の場所もあるわけだけど、広島はそれを真ん中にもつてきている。中心に据えているわけですよね。普通の共同体だったら、村からはずれた自然に近いところに墓があつたり、寺があつたり、田園があつて、それとは違う中心地に集落があつたりする。